■研究十二月往来〈220〉

雲となり雨となる

三宅晶子

能の中には、「雲となり雨となる」という、ちょっと不思議な言葉がよく使われている。

『文選』十・高唐賦并序

去而辞曰、妾在巫山之陽、高丘之岨、旦為朝雲、暮為行雨、朝々暮々陽台之下

の傍線部を踏まえた表現で、「夢うつつとも分かぬ状態や、天候の変化する有様をいう」と謡曲集諸注には説明されている。一種の慣用句として、三種類の用法で用いられている。

①人の死を意味する表現に使われる。

〈船橋〉4［クセ］……霞の空もかき昏らし、雲となり雨となる、中有の道も近づくか、橋と見えしも中絶えぬ、ここはまさしく東路の、佐野の舟橋鳥は無し、鐘こそ響け夕暮れの、空も別かれになりにけり、

〈松山鏡〉1［名ノリ］（ワキ）……又今日は彼が母の命日にて候ふ程に、持仏堂に立ち出で、焼香せばやと思ひ候。

2［サシ］（子方）雲となり雨となり、陽台の時留め難く、花と散り雪と消え、金谷の春行くへもなし、

＊〈定家〉8［（クリ）］……情の末、花もみぢも散りぢりに、朝の雲夕べの雨と

［哥］古言も今の身も、夢も現つも幻も、共に無常の、世となりて跡も残らず。

②神・鬼などが昇天する場面に用いる。

〈融〉10［ロンギ］……鐘も聞こえて月もはや、影傾きて明け方の、雲となり雨となる、この光陰に誘はれて、月の都に、入り給ふよそほひ、あら名残惜しの面影や、名残惜しの面影。

〈金札〉5［哥］迦陵頻伽の聲ばかり、虚空に残る雲となり、雨と鳴るや雷の、光の中に入りにけり、

③神・鬼などが出現する場面に用いる。

〈須磨源氏〉8［ロンギ］雲となり雨となり、夢現とも分かざるに、天より光さす、御影の中にあらたなる、童男来たり給ふぞや、さては名にし負ふ、光源氏の尊霊か、

〈是界〉6［上ゲ哥］梢の嵐吹きしをり、雲となり雨となり、山河草木震動し、天に輝く稲光、大地に響く雷は、肝魂を暗まかす、こはそも何の故やらん。

ところでこの句は、『源氏物語』葵巻に、類句が存在する。

風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙もあらそふここちして、「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」とうちひとりごち……中将も、いとあはれなるまみにながめたまへり。

雨となり時雨るる空の浮雲をいづれの方とわきて眺めむ

「行方なしや」とひとり言のやうなるを、見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ

源氏が葵上の死を「雨となり雲となったのか」と悲しむ場面である。この典拠は、唐の詩人劉禹錫（りゅうう せき）の亡妻を悼む詩「有所嗟二首」（『劉夢得外集』第一）の一首目である。

庚令（ゆれい）楼中初見時　武昌春柳似腰肢
相逢相笑尽如夢　為雨為雲今不知

藤原定家の『源氏物語奥入』には、「相逢相笑尽如夢」を「相逢相失両如夢」とし、「夢得、白楽天同時人也。おもふ人におくれて作詩也。」と紹介されている。「高唐賦并序」を踏まえ、「朝には雲となり、夕べには雨となる」と言い残した巫山の神女に重ねることで、人の死を美化している点に特色がある。『源氏物語』にもそれは活かされている。

この表現を最初に歌で用いたのは、藤原俊成であろうか。『長秋詠藻』には、「右大臣家百首　治承二年（一一七八）五月晦日比給題七月追詠進」として、「紅葉」の題で次の歌が所収されている（『続古今集』入集）。

雲となり雨となりてや竜田姫秋の紅葉の色を染むらん

この歌は高唐賦を踏まえて、紅葉という自然現象を引き起こす時雨は、龍田姫が雲となり雨となったのだと見立てている。この句はその後、新古今歌壇において注目され、慣用句となったらしい。建久四年（一一九二）六百番歌合では、藤原有家が「昼恋」の題で詠んでいる（『新勅撰集』恋二入集）。

雲となり雨となるてふ中空の夢にも見えよ夜ならずとも

『新勅撰集』恋二には、もう一首「御京極摂政家百首歌よみ侍りける　小侍従」として

雲となり雨となりても身にそはばむなしき空を形見とや見む

の歌が入集している。両首は人の死を悼み、亡き人の昇天を雲となり雨となったと見立てており、『源氏物語』の影響下にある。以後亡き人にはかなく思いを寄せる恋を表す語として定着している。『菟玖波集』巻十五には、

行衛もしらず亡き人の跡
雨となり雲となりてや迷ふらん　源信武

が入首している。『正徹物語』では「幽玄体」の説明に巫山の神女の故事が使われ、正徹はこの故事が特に気に入っているようで、『草根集』には関連歌が三首ほど見られる。

この句の特徴として大切なことは、雲や雨に人や神などの存在が重ねられていることであろう。雲となり雨となるのは、単なる自然現象ではなく、必ずそこに亡き人や神などの存在がある。そのことから離れては、成立し得ない。能に用いられている場合も、この句を耳にした観客が理解するのは、雲や雨になっている人や神の存在であろう。

①に属する三曲は、その点『源氏物語』以来の和歌・連歌の世界での用法に忠実な例であろう。②の〈金札〉は、神官が俄に姿を消して「天津太玉の神なり」と虚空に声だけが聞こえるのに対して、「雲となり、雨となるや」と見送るのであるから、神の昇天の形容である。これも伝統的な素直な使い方である。

ところが、〈融〉の用い方は特異である。月が沈み、陽が昇ってくる直前の、薄明かりの形容に用いているのである。「月もはや、影傾きて明け方の、雲となり雨となる、この光陰に誘われて」と「この」としている以上、光陰の形容であるとしか考えられない。ではどんな光陰かといえば、晴れているのに急に時雨れるような、異常気象であろう。仲秋の名月に照らされた夜空を舞台に、融の霊が楽しげに舞うこの場面を、世阿弥は非人間的非日常的な美的現象として統一的に描いている。その最後に、夜明け直前の空の様子を、昇天を想起させる慣用句を利用して描写するのは、おもしろい方法である。「現実世界では起こりえない美しさを見せる風景、それは月世界への昇天という行為が引き起こしているエネルギーの異常現象である。」という考え方なのではなかろうか。つまり、世阿弥は人の死、あるいは神的存在を感じさせる慣用句を夜明けの情景描写に用いることによって、昇天の予兆としているのである。

これは「雲となり雨となる」という句の伝統的用い方からいくと特殊な方法であろう。観客はこの句で実際の昇天よりも前に、その情報を受け取ることになってしまう。「異常気象すなわち予兆」という新しい意味をこの句に与えているのであるならば、少し乱暴な使い方で、意味的には少々混乱をきたす。しかし新しい意味を理解した上であれば、この場面での用い方は成功している。

世阿弥が意図的に従来の意味とは別の使い方でこの句を使用したのか、誤解によるのか不明であるが、〈須磨源氏〉は〈融〉よりもさらに過激に、予兆としての用法に徹している点、作者や成立時期を考える際、興味深い現象である。神的存在の予兆を表す語として何の不安もないらしく、出現の予兆に用いているのである。ここまで来ると、本来の意味からは完全に離れて、独立句として一人歩きしていることがわかる。〈是界〉の存在もそのことを示唆している。その原因を作ったのが〈融〉であるのかもしれない。

〈須磨源氏〉は、『五音』に作曲者名無しで前シテ登場の段が所収されているので世阿弥が関与した作品ではあるが、どうもやはり、言葉の使い方が世阿弥らしくない。

（横浜国立大学教授）